

# メキシコにおける1920年代の「家庭学校」と 女子技術教育

松久玲子

## はじめに

「ガブリエラ・ミストラル家庭学校」(Escuela Hogar para Señoritas “Gabriela Mistral”)は、メキシコにおいて、公教育相に就任したばかりのホセ・バスコンセロス(José Vasconcelos)<sup>1</sup>がチリの作家ガブリエラ・ミストラル(Gabriela Mistral)を迎え、鳴り物入りで1922年に開校した女子学校である。これだけで、メキシコの将来を担い、ミストラルの理想を体現する女性のための教育機関だと推測がつく。そして、バスコンセロスが設立した学校ならば、伝統的なカトリック教会の教えとは異なる「新しい」女性像を掲げる学校にちがいないことが想像される。新たに設立されたこの家庭学校(Escuela-Hogar)とはどのような教育機関なのだろうか。実は、この学校は技術教育局の管轄の下に設立された。つまり、土木技師、鉱山技師、左官、大工、活版印刷、速記やタイプを教える学校と同じカテゴリーとして技術教育局の管轄に家庭学校が入れられた。それでは、この家庭学校で教える「技術」とは何なのか。技術教育局と「家庭」という組み合わせの響きにはある種の違和感がある。

技術教育に「女子」をつけ、技術教育が有徴化されることにより、技術教育が本来男性の領域であり、「女性向き」の職業・職種・技術は特別だというメッセージが伝達される。

その背景には、もともと、植民地時代の教育機関は男性のみを対象とし、その延長上で専門職教育、技術教育は男性の占有物だったという歴史がある。そして、その裏には女性は家庭という前提があり、家庭は再生産の場として「自然」領域に属していた。女性のための専門職教育、技術訓練校が生まれ

『GR—同志社大学グローバル地域文化学会 紀要—』1, 2013, 21—57頁。  
同志社大学グローバル地域文化学会 ©松久玲子

たのは独立以降、男性を対象として教育機関が設立された後である。女子専門職教育、技術訓練学校が形成される過程で、「女性向け」の職業も女性向けの技術教育も作られた。

メキシコでは、19世紀末から20世紀はじめに、国家事業として政府が女性の教育に本格的に取り組んだ。技術教育は、近代化、産業化への国家の要請に応じて組織されたが、女性の技術教育を受け持つ学校もその一部として設立された。女性に生産技術を身につけさせるための技術教育は、旧来のジェンダー規範が揺らぐ中で、何を女性に学ばせるかという点で未だ形成途上にあったといえよう。本論文では、ガブリエラ・ミストラル家庭学校の設立の経過と実態を分析し、女性の技術教育の中に新たなジェンダー規範が挿入され、女性の技術教育にどのような変化が現れたのかを明らかにする。この女性向け技術教育が、労働分野における「女性向き」職業の形成と関連があるのかを検討したい。まず、第1章では技術教育に関する先行研究を概観し、その中で女子技術教育に関する問題設定を行う。第2章ではディアス時代(1876年から1911年)からの技術教育の歴史をたどり、女子技術教育が技術教育および女子教育の中でどのように位置づけられていたかを明らかにする。第3章では、ガブリエラ・ミストラル家庭学校の設立から再編に至る過程と教育内容の変化を検討し、第4章では、ジェンダーの視点から女子技術教育が社会に期待された役割の背景を考察する。

## 1. 先行研究

1922年に、ガブリエラ・ミストラル家庭学校が設立された後、家庭学校は連邦区および地方でも設立された。当時、小学校卒業後の技術・技能訓練を行う技術学校設立が計画され、ミストラル家庭学校もその一つとして計画された。しかし、当時の教育省予算の逼迫と一部の業界の反対により、ミストラル家庭学校と国立土木学校 (Escuela Nacional de Maestros Constructores)<sup>2</sup>の2つだけが設立された。国家再建政府の下で、家庭学校は公教育省技術教育局 (Departamento de Enseñanza Técnica, Secretaría de Educación Pública) の管轄の下で開校された。女性に対する技術教育機関としての家庭学校の意味を考える上で、20世紀初頭におけるメキシコの技術教育 (Educación Técnica)<sup>3</sup>

に関する先行研究を見てみたい。

メキシコの技術教育史の先行研究は、メキシコの産業発展とそれに対応する技術学校史が主流である (Rodríguez 2002; Calvillo et al. 2006)。もう一つは、近代教育史の中で職業教育を位置づける研究である (Bazant 1993; Meneses 1998; Latapí 1998)。カルヴィジョ等が記した国立工科大学 (Instituto Politécnico Nacional 以下IPNと略す) の『70年史』は学校史ではあるが、独立期以降から現代に至るメキシコの産業発展と技術教育の展開、さらに技術教育を担う教育機関の歴史をたどった技術教育史となっている (Calvillo et al. 2006)。IPNの執筆者の一人でもあるロドリゲスは、同様の観点から、植民地時代以降から現代までの技術教育史を、技術学校の設立と再編をたどることにより明らかにしている。教育機関の設立史に、産業の発展に伴い必要とされる技術とその教育の歴史を重ねて記述する手法をとっている。ここでは、個々の学校の設立と再編が中心的なテーマであり、特に技術発展のメインストリームではない周辺に位置づけられた女子技術教育については、学校の設立は取り上げられているが、教育内容などは詳細には検討されず、それが社会にどのような意味をもったのかは明らかにされていない。

教育史研究では、国家のフォーマル教育システムの中でどのように職業教育が位置づけられたかという視点から技術教育が取り上げられている。メネセスは、『メキシコにおける公教育の傾向 (*Tendencias Educativas Oficiales en México*)』において、政治的な変化つまり政権の交代による教育政策の変遷をたどり、メキシコの教育政策に通底する教育哲学を明らかにしようとした。随所で技術教育に言及し、教育制度の中で、初等教育、中等教育との関係性において技術教育 (Enseñanza Técnica) が差異化され、形成されたと述べている (Meneses 1983, 1986)。メネセスによれば、メキシコ革命後の国家再建政府においてバスコンセロスが公教育省を率い、教育制度が整備される中で、徒弟制により養成されていた人的資源を国家が職業・技術教育制度を通じて養成しようとした。そして、農・工・商の3分野において専門技術職と非熟練労働職の中間レベルの技術者を養成するための教育機関を設立した。また、初等教育の普及が遅れている農村教育の目的の一つとして、農村の発展を支える技術教育を重視した。

バザンは、ディアス（Porfirio Diaz）時代の教育政策の中で、小学校修了後、あるいは初等教育の補償教育として成人教育が着目され、識字とともに貧困層が生活を支えるための技術・技能を教える夜間学校や技術教育が展開されたと指摘している。専門職教育がエリート専門職層を作りだしたのに対し、技術教育は小学校卒業後の民衆教育の受け皿としての役割を果たすことが期待されていたことを明らかにしている。そして、女子技術教育は、小学校修了後の女子に生計を立てるための技術を身につけさせることを目的としたと述べられている（Bazant 1993:103-127）。

何れにしても、近代化が進められる中で産業の発展とともに労働市場の中心となる男性を対象とした技術教育機関が設立された。その過程で、女性にも関心が向けられた。教育機関の設立を通じて、技術教育が民衆に開かれる中で、男性向けの技術と女性向けの技術が峻別され、制度的に教育システムに組み入れられた。こうした視点から、その過程を技術教育の中で分析した教育史、あるいは女子教育史の研究はほとんどない。また、女性史のなかでは、女性の教育がどのようなイデオロギーの下で形成されたかが着目されてきたが、特に技術教育に焦点をあてた女性教育史はほとんどない。

一方、初等教育を受けることができない子どもたちや初等教育をドロップアウトした子どもが、20世紀初頭の社会でどのように生きていたか、そして社会の中でどのように問題化されたかを扱った児童労働、児童を取り巻く社会福祉に関する研究が近年進んでいる（Sosenski 2010, Blum 2009）。これらの社会史研究は、児童だけでなく子どもを含む家族のあり方を含み、必然的にメキシコ革命期に提示された近代家族像を照射する。乳児死亡率の改善、健康な子どもの育成は、当時の優生学が「科学的」裏付けとなって政策に反映され、この時期に普及した母子保健システムは、子どもの健康を管理する母親の役割へと繋がる。児童福祉をめぐる言説は、女性のジェンダー規範と密接に結びついているが、女性のための家庭学校を考察する上でも重要である。

本論文では、メキシコの近代化過程において女性に課せられたジェンダー役割が変化する中で、社会的要因と関連した育児学がどのように女子技術教育において近代的技術として導入されたのか、そして後に技術分野から排除

されたのかを、家庭学校の設立から再編の過程を検討する事により明らかにする。資料としては、公教育省古文書館（Archivo Histórico de SEP）のガブリエラ・ミストラル家庭学校および女子技術学校関係の資料を基礎とし、家庭学校および関連する技術教育学校において展開された教育の内容、設立方針、および運営について分析することにより、家庭学校が技術教育においてどのような役割を持ち、女子技術教育がメキシコ社会においてどのように位置づけられたのかを明らかにする。

## 2. 女子技術教育の背景

### 2.1 1920年代の女子教育

1921年における公教育省の設立を契機に、メキシコでは政府が中央集権的な国民教育制度の普及に本格的に取り組みだした。公教育制度そのものは、1867年に公教育組織法、1888年に義務教育法が公布され、1891年に連邦区および諸地方における義務教育施行規則によりメキシコ市を中心として公教育制度が形成されつつあった。しかし、ディアス時代の公教育制度は、州や自治体はその責任主体であり、地域によって教育制度の普及には大きな差があった。ディアス時代の末期に、バランダ（Joaquín Barranda）やフスト・シエラ（Justo Sierra）が教育会議を開催し、全国の教育制度の統一化を図ろうとしたが、統一的な公教育制度の普及は、メキシコ革命の動乱が終息した後のバスコンセロスの政策に負うところが大きい。

ディアス時代前後の近代化の始まりとともに、教育制度が整備され始め、男子のみを対象とする教育機関だけでなく、女子を対象とした教育機関が設立されていった。1868年に女子中学校設置令が公布され、1875年に国立女子中学校が開校し、次第に地方にも公立の女子中等学校が設立されていった。女性のための中等教育が制度化され、そこで女性も教員資格が取れるようになった。1885年には師範学校設立令が施行され、1887年にメキシコ市に師範学校が設立された。続いて女子師範学校設置令が1889年に出され、小学校教師として女性の教員が養成された。初等教育普及のために、まず師範学校が整備された。そうした中で、教職は数少ない女性の専門職の一つであり、おそらく女性に門戸が開かれている、唯一かつ最大の専門職教育だった。

1920年代の初等教育制度としては、民衆層のための6年間の小学校と、その後の2年から3年の高等小学校があった。1925年における学齢人口（5歳から14歳）に対する就学率は27.7%、さらに小学校修了後は、ほんの一握りの生徒が進学するにすぎない（Martínez 1996:341）。特に、大部分の民衆層の女性の場合、小学校に入学し6年間の課程を修了する割合はわずかだった。それは、1920年の女子の識字率を見ると明らかだろう。1921年の全国人口統計によれば、非識字人口は10歳以上の全人口のうち64.8%をしめる。男性の61.7%、女性の67.6%が非識字である（INEGI 1996:106）。

小学校修了後には、中等教育として中学校、プレパトリア（大学準備級）があったが大部分は男子を対象としており、女子の入学を認めているプレパトリアは限られていた。当時は、小学校を卒業した後に中学校・プレパトリアに入学し、大学へ進学するごく少数のエリート教育と、小学校あるいはその後の高等小学校を卒業して社会に出て行く民衆のために複線型の教育システムをとっていた。

1925年の種類別の学校数および生徒数を見ても明らかのように（表1、表2）、小学校卒業後の教育機会は限られたものであり、参入できる生徒数も限定的だった。プレパトリアの他に資格取得を目的とする専門職教育は、中等教育あるいは中等教育を延長する形で構成されていた。女子専門教育では、専門職の資格を取ることができた。その中で、最も取得しやすいのは教職資格だった。女子中学校、女子師範学校、家政学校に入り、小学校教員あるいは家政科教員の資格をとることができた。これには、小学校卒業後、3年ないし5年の教育を受ける必要があった。地方では、初等教育を修了した後、無資格教員として学校で働き、教員経験を経て教職の資格試験に合格して正式な教員となるものもあった<sup>4</sup>。

技術学校は、専門職の資格を取れず、小学校あるいは高等小学校修了後に、男子を対象として熟練工や監督・中級技術者を養成する技能教育機関、あるいは女子を対象として生計を立てるための技術を身につけるための教育機関として設立された。技術学校が設立されたのは主に都市であり、農村では小学校卒業後の教育機会は非常に限られていた。19世紀末から20世紀はじめにかけて女子職業技術系学校が設立されたが、最初にそれらの学校が開校され

表1 1925年のメキシコの学校数

	連邦立	市町村立	私立	計
幼稚園	31	43		74
農村学校	1,900	4,635		6,535
小学校	543	4,543	1,566	6,652
師範学校	6	27	17	50
プレパラトリア	2	26	22	50
専門職業学校	11	34	24	69
技術教育、実業教育	27			27
芸術	3			3

出典：Meneses 1998:510より作成

表2 1925年のメキシコの学校別生徒数

	連邦立	市町村立	私立	計
幼稚園	6,404	5,219		11,623
農村学校・小学校	267,900	704,532	118,184	1,090,616
師範学校	2,826	5,093	913	8,832
プレパラトリア	4,891	5,627	1,917	12,435
専門職業学校	5,338	1,102	946	7,386
技術教育、実業教育	22,637			22,637
芸術	2,854			2,854

出典：Meneses 1998:510より作成

た連邦区では、1921年の10歳以上の非識字者は全体の24%を占め、その内訳は男性が19.3%、女性は27.9%だった。前述の全国非識字率と比べ、連邦区の非識字率は男女共にかなり低い（INEGI 1996:106）。その背景には連邦区における初等学校の普及があった<sup>5</sup>。都市で女子技術教育を受ける生徒は、極貧ではなく、経済的にある程度安定した層だったと考えられる。その日の生活に困窮する女性たちが小学校卒業後学校へ通うということは考え難い。中等学校、師範学校、専門職業学校等に進学しない女性たちは、実業学校、技術学校などで特定のコースを取ることができたが、そこでは専門職の資格を取ることはできなかった。技術教育は、初等教育と中等教育の中間の教育機関として、初等教育を修了した女性たちを対象としていた。

## 2.2 技術教育と女子技術教育の形成

メキシコの技術教育は、農・工・商の分野における技術・職業教育として、職業を持つ上で必要な知識・技能・態度を身につけさせる目的で形成された。独立以前のメキシコでは技術教育はギルドの中で担われてきたが、独立後、産業化に向けて技術・職業学校を設立する必要に迫られた<sup>6</sup>。1831年に国立実業学校（Escuela Nacional de Artes y Oficios）が設立されたが、男性のみが対象で女性は入学できなかった。1857年法による公教育の整備に伴ない、19世紀後半には実業学校（Escuela de Artes y Oficios）が様々な州で設立された。この時期の技術学校は、孤児や貧困層の大衆を対象とした教育として慈善学校や慈善施設の付属学校として設立されたものもあった<sup>7</sup>。1871年に女性を対象とした国立女子実業学校（Escuela Nacional de Artes y Oficios para mujeres）がメキシコ市に設立された。この学校は、1877年にメキシコ初の女性による文芸雑誌『アナワックの娘たち（Las Hijas del Anáhuac）』を付属の工房で刊行したことで知られている。設立当初の目的は、「わずかの経費で一定の収入をえること」だった。自由に講座を選ぶことができたことと、慈善的な性格が強く、貧しい生徒に食事を提供したことで成功をおさめたとされる。女子実業学校では、13歳から29歳の女性に初等教育も提供され、開設当時、510名の女性たちが登録した。1880年に開講されていた講座は、書き方、算数、簿記、裁縫、刺繍、造花作り、歌、ピアノ、金メッキ、装丁、飾り紐作り、印刷、綴織、絵画などだった（Bazant 1993:120）。

都市における慈善的教育機関とはどのようなものだったのだろうか。この時期のメキシコ市では、農村から都市への人口移動が起っていたが、都市の産業化には限界があり、農村から流入する人々を雇用し吸収できなかった。特に女性の労働市場は限られていた。プリスによれば、1879年におけるメキシコ市の工場数は736で、12,550人の労働者を雇用していた。都市へ惹きつけられてきた地方出身の女性たちは、仕事がなく当時売春婦の数が増加したことが報告されている（Bliss 2003:247）。売春婦に象徴される都市文化の乱れに対して、都市の裕福な保守層により取られた社会対応のひとつが慈善事業だった。

ディアス時代には、近代化と産業化が急速に進められる中で、実践的な技



術・技能を身につけた下級技術者や熟練工を養成する教育機関が設立された。また、海外資本の導入を背景に外国人の専門職が指導をして産業化が進められたため、小学校、あるいは高等小学校修了程度の国民に対する中等教育レベルの技術教育に特に関心が示された。女性に開かれた職業教育は、教職のみで他の職種はほとんどなかった。技術学校では、公教育省の管轄のもとに初等教育も提供された。また、女子師範学校には、電話交換手、電気製版技術の教職講座、びっくり箱を制作する作業場が備えられていたが、それらの講座は技術学校に移転し、専門職教育から技術教育が分離された。

1897年に国立技師学校、商業高等学校、実業学校を設立するために職業教育法（Ley de Enseñanza Profesional para la Escuela Nacional de Ingeniero, Escuela Superior de Comercio, la Escuela de Artes y Oficios）が公布されたのを期に、技術教育行政に変化が見られ始めた。1903年には、モラ博士男子初等工業学校（Escuela Primaria Industrial para varones Doctor Mora）が設立された。同時期に女性への技術教育も開始された。1901年にはミゲル・レルド・デテハーダ女子商業学校（Escuela Comercial para Señoritas Miguel Lerdo de Tejada）が設立された。また、1905年に公教育・芸術省が設立され、フスト・シエラのもとで1907年にはじめて技術教育を管轄する技術教育課（Sección de Enseñanza Técnica）が置かれた。シエラは、パリの高等技術院出身のフェリックス・パラビシーニ（Félix Fulgencio Palavicini）に技術教育の海外視察を命じた。さらに、1910年に女子技術教育機関としてケレタロ・コレヒドーラ工業技術学校（Escuela de Arte Industrial Corregidora de Querétaro）が設立された。

メキシコ革命の動乱の中で、1915年にパラビシーニが公教育大臣（Ministro de Instrucción Pública）になると、技術教育部（Dirección de Enseñanza Técnica）が設立された<sup>8</sup>。1917年には、国立女子家政学校（Escuela Nacional de Enseñanza Doméstica）が設立され、ここでは家庭科教員資格をとることができた。1919年までに、メキシコ国内には88の工業、鉱業、商業、実業学校があり、そのうち71校が公立学校、19校が私立学校だった。また、メキシコ市には14校の技術学校と8つの技術学校付属夜間学級があった。そのうち、女子技術学校は共学を含め6校、女子夜間学級は4つあった<sup>9</sup>。

公教育省（Secretaría de Educación Pública）が設立され、バスコンセロスが

公教育相となると、技術教育にも大きな転換が訪れた。バスコンセロスは旧来の実業学校を近代的技術学校へと転換しようとした。1921年に技術教育部（Dirección de Enseñanza Técnica）が学校局（el Departamento Escolar）内に置かれた<sup>10</sup>。バスコンセロスが公教育相を務める間に、30の技術学校が作られ、そのうちの9つがメキシコ市に設立された。その後、1925年に商工業技術学校局（Departamento de Escuela Técnica Industrial y Comercio 以下DETICと略す）が設立され、技術教育の基準が明確化された。小学校教育修了が技術学校入学要件となり、技術学校は高等技術学校、プレパトリア、専門職学校へ入学する準備学校として位置づけられた。技術・職業教育は女性に拡大され、様々な州で一定の技術訓練、特に伝統的技術訓練が行われた。

メキシコ革命後の教育改革の過程で、高等教育レベルの技術教育が組織されていった。1936年の国立工科大学（Instituto Nacional Politécnico）の設立はメキシコにおいて高等教育レベルの技術教育機関が設立されたという意味において、技術教育の集大成と考えられている（Calvillo et al. 2006）。しかし、女子の技術教育分野は、技術教育が専門化の中で中等教育レベルや高等教育レベルのフォーマル教育に編成されることはなく、成人を対象としたノンフォーマル教育<sup>11</sup>にとどまっていた。1924年から1928年間の主要な女子技術学校の生徒数の変化を見ると、表3に示すとおり、家政学校や家政学校の登録者数に減少傾向が見られる。

表3 1924年から1933年の主要な女子工業学校登録者数

学校名/年度	1924	1925	1926	1927	1928	1933
国立女子実業学校	1,412	1,567	1,222	1,062	992	
国立家政学校	1,480	1,337	1,250	1,085	855	190
ケタロ・コレヒドーラ工業技術学校	1,748	1,730	1,545	1,394	1,371	
ミゲル・レルド・デテハーダ女子商業学校	1,296	1,081	980	991	1,344	1,379
ガブリエラ・ミストラル商工業学校	1,787	2,694	1,582	1,014	1,034	
ソル・ファナ・イネス・デラクルス工業学校	872	1,012	733	577	585	
マリナルショチトル工業学校 (Escuela Industrial Malinalxóchtitl)			697	1,496	1,876	
女工工業学校 (Centro Industrial para Obreras)	1,399	1,987	1,393	1,425	1,175	

出典：Calvillo et al. 2006, p.50より作成（学校名称はCalvillo et al.の記述のままとする）

### 3. ガブリエラ・ミストラル家庭学校と女子技術教育

#### 3.1 家庭学校の設立と再編

ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、1922年に技術教育部の監督のもとに設立された。それ以前の女子を対象とした技術学校は、国立女子実業学校（1871年設立）を皮切りに、ミゲル・レルド・デテハーダ女子商業学校（1901年設立）、ケレタロ・コレヒドーラ工業技術学校（1910年設立）、国立家政学校（1917年設立）があげられる。

その後、1925年にDETICが設立された時点で、ソル・フアナ・イネス・デラクルス工業学校（Escuela Industrial Sor Juana Inés de la Cruz）が加わった<sup>12</sup>。1928年に、大規模な技術学校の再編が行われた時、同系統の学校の一本化が行われた。ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、ガブリエラ・ミストラル工業学校（Escuela Técnica Industrial y Comercial Gabriela Mistral）と名称変更された。代わりにソル・フアナ・イネス・デラクルス工業学校の名称は、ソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校（Escuela Hogar Sor Juana Inés de la Cruz）となった。その後、さらなる再編の中で、家政教育（enseñanza doméstica）は国立家政学校に特化され<sup>13</sup>、女子技術学校は学校毎に異なる技術教育を担うと同時に、中学校と差異化することが求められた。技術教育をより専門化するために作業場の施設を充実させ、特定の選択授業だけに出席する自由講座制は廃止された。1936年の時点では、ミゲル・レルド・デテハーダ女子商業学校、国立女子家政学校以外のすべての女子技術学校は裁縫・縫製学校（Escuela de Costura y Confeción）と5つの商業・裁縫学級（Academia de Comercio y Costura）に再編され、ガブリエラ・ミストラル工業技術学校は、1936年には第三商業・裁縫学級（Academia de Comercio y Costura 3）となっている（Calvillo et al. 2006:143）。

ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、設立からわずか6年でその名を変更し、女子工業学校として発足し、さらに裁縫学校となった。ガブリエラ・ミストラル家庭学校だけでなく、他の女子技術学校も同様に、再編の中で狭い範囲の限定的な技術指導体系と将来性のない「女性向き」技術教育へと縮小化されていった。ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、この縮小化へとつながる

「女性向け技術教育」の揺らぎの只中であつたと言えよう。では、女性の技術教育とはどのような概念だったのか、ミストラル家庭学校の教育内容から検討してみたい。

### 3.2 家庭学校の教育方針と学校規則

ガブリエラ・ミストラル家庭学校の教育理念を、チリから招聘され学校を任されたミストラルの考えに依拠して探ってみたい。ミストラルは、1922年から1924年までメキシコに滞在し、家庭学校のための教科書として『女性のための読本 (*Lectura para mujeres*)』を執筆した。1923年7月31日付けで書かれた序文によれば、すべての女性は精神的母性を持ち、それが女性の存在理由であると述べている (Mistral 1997:XV)。ミストラルは、女性の自由な職業や産業への参加がますます増大し、女性に経済的自立などの利点をもたらすが、それはある種の家庭の分解と母性の緩慢な喪失をもたらすと警告し、女性本来の場所は家庭であることを示唆している。また、この学校の生徒は15歳から30歳の幅広い年齢層であるため、それに対応する教科書を編集すると述べている<sup>14</sup>。

1922年に、ガブリエラ・ミストラル家庭学校の学校規則が学校長名で出された<sup>15</sup>。前書きの設置趣旨では、ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、「家庭が必要とする教育を女性に与え、女子が一人で独立して生活する方法を身につけ、知的発達と女性の性格を向上させるように努力する」と述べられている。第1章は、はじめに女性の役割を認識し、「現代社会が必要とする家庭の仕事」を具体的に女性に教育すること、そして産業においては、「必要とする者」に「品格ある職業を与える」と書かれている。まず、女性の第一の役割は家庭での役割であり、仕事をもつ必要がある女性には品格ある、つまり「女性としてふさわしい」職業訓練をすることが、この学校が追求すべき目的とされた。

第2章の一般規則では、この学校が国立（連邦立）学校で、視学官<sup>16</sup>による監督を受けることが明記されている。他に学校の行政的側面として、学校長に関する任務と権限に関する規定、事務長、事務職員、書記、出納係、図書館司書、教頭、用務員、門衛の職務規定と、教員の義務が定められている。

教員会議と講演会に関する規定のほか、生徒に関する規定では、家庭学校の生徒は正規コース生、自由コース履修生、科目履修生の3種類がある。正規コース生と自由コース履修生は、最終試験に合格すると家庭学校の修了証書を授与される。また、専門教育試験<sup>17</sup>を通ると、更に上の専門学校へ入学が可能となる。学校には、実習作業場の設備があり、実習が行われる。

生徒の入学資格は、12歳以上で親あるいは後見人の許可が必要であり、伝染病にかかっていないこと、学校規則に従うこと、としている。小学校修了後の教育機関のひとつとして設立されたことは明白である。家庭学校は、ディアス時代の女子実業学校の伝統を受け継ぎ、女性の第一の義務は家庭にあり、やむを得ず手に職を得る必要のあるものに技術教育を施す方針を継承している。また、初等学校を修了後の成人の教育的受け皿のひとつであるという点でも共通している。

### 3.3 カリキュラム

1922年に作成されたカリキュラムでは、家庭学校の教育目的を以下のよう

1. 当学校は、その目的として慣例を尊重し、若い女性たちに家庭で果たすべき役割をしかるべく充足させるための教育を行うことを目的とする。さらに学校は、様々な家庭での仕事と密接に関係した技術教育を与える。
2. 広範で女性にふさわしい文化的準備を与えることを目的として、ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、生徒に技術教育の講座と並行して、一般教育を提供する。
3. 総合的教育が人生におよぼす良き影響を考慮して、当学校は十分完成した社会文化を生徒に教える努力をする。
4. 家庭生活をより魅力的にするために、家庭生活を美しくする高尚な社会的目的を実現するよう努力し、市民としての美德の基礎となる個人の美德を形成する。同様に、女性の様々な職業の尊厳を守る努力をし、若い女性たちに道徳的、社会的、経済的向上への意欲を目覚めさせる。

5. 当学校の恩恵が可能な限り多くの女性たちに届くように、正規コースと自由コースの2つの講座を提供し、それらを昼と夜に開設する。  
(AHSEP, 1922.3, Plan de Estudios de la Escuela Hogar para señoritas “Gabriela Mistral”)

正規コースは、2年間のコースで家庭のための一般教育と技術教育を学び、表4のようなカリキュラムが組まれていた。特に多くの時間数を占めているのは、一般教育では国語、倫理と礼儀作法、算数に加え、家政学、技術教育では料理と保存、育児学 (puericultura)、看護、家事 (洗濯、アイロン掛け、シミ抜き、クリーニング)、裁縫、リネン製品づくり、ミシン刺繍で各4時間以上となっている。一般教育では、読み書き、計算と倫理が基本で17時間、学科が11時間、いわゆる「家庭のため」の家政学と家事全般の実習が37時間

表4 ガブリエラ・ミストラル家庭学校の正規コース・カリキュラム (1922年)

一般教育	第一学年		第二学年	
国語	1h. 週3回	/3h.	1h. 週2回	/2h.
倫理と礼儀作法	1h. 週2回	/2h.	1h. 週2回	/2h.
数学と家計	1h. 週2回 (幾何)	/2h.	1h. 週2回 (家計)	/2h.
幾何	1h. 週2回	/2h.	1h. 週2回	/2h.
メキシコ地理	1h. 週2回	/2h.		
メキシコ史	1h. 週2回	/2h.	1h. 週1回	/1h.
家政学	2h. 週2回	/4h.		
物理と自然の実践的知識	1h. 週1回	/1h.		
家事の化学	1h. 週2回	/2h.		
生理学と衛生	1h. 週2回	/2h.		
デッサンと装飾絵画	1h. 週1回	/1h.		
体育	1h. 週1回	/1h.		
ソルフエージュと合唱	1h. 週1回	/1h.	1h. 週1回	/1h.
技術教育				
料理と保存	2h. 週2回 (料理)	/4h.	2h. 週2回 (保存)	/4h.
育児学	2h. 週2回	/4h.		
看護	2h. 週2回	/4h.	1h. 週1回	/1h.
洗濯、アイロン、シミ抜き、クリーニング	2h. 週2回	/4h.		
裁縫	2h. 週2回	/4h.		
リネン製品づくり	2h. 週2回	/4h.		
ミシン刺繍	2h. 週2回	/4h.		

出典：AHSEP資料より作成

で、カリキュラムの中で大きな割合を占めている。

家庭学校のカリキュラムには、育児学のカリキュラムがアントニア・ウルスーア (Antonia Ursúa) により1922年8月に作成されている (表5)。ウルスーアは、産科医であり第一回メキシコ児童会議に参加したメキシコ優生学協会の活発なメンバーだった。特に、育児学は、家庭学校において新規な科目あるいは重要な科目であると認識されていたと考えられる。1学期 (2ヶ月) で16回の授業、64時間で、5学期で育児学のカリキュラムを修了するように作られている。内容は、保育の定義、幼児期と幼児の特徴、新生児および乳児の生理学、衛生、子どもにするべき世話について学ぶ。

表5 ガブリエラ・ミストラル家庭学校の育児学カリキュラム

学期	教育内容
1学期	育児学－定義 幼児－幼児期と幼児の特徴 新生児および乳児の生理学：呼吸、体温、鼓動、肌、誕生直後のケア 新生児のケア：消化、排泄、栄養と体重、予防注射など
2学期	新生児と乳児の衛生：母乳、食事、授乳、授乳時の危険、乳母の選択、授乳中の母親の衛生
3学期	人工授乳、混合栄養
4学期	虚弱児の世話、栄養：先天性虚弱児の定義
5学期	まとめ

出典：AHSEP資料より作成

教科書は適切なものがないため、ウルスーアの3年間の実践を通じて、メキシコの習慣にあったカリキュラムを作成したと記されている。当時の優生学運動の影響のもとで作成され、新生児の世話や授乳についての専門的知識を与えるもので、「科学的」な育児が女性の重要な役割として考えられていることが見て取れる。

自由コースは、特定の技術の習得とそれに関連する教養的科目4ないし5科目程度を組み合わせた講座であり、自由に選択ができる。ガブリエラ・ミストラル家庭学校では、15の技術講座が提供され<sup>18)</sup>、各講座は1年半で修了できる。例えば、「料理」講座は、料理、国語、算数と会計、家事のための化学、衛生と生理学の5科目が組み合わせられている。「育児学」講座は、育児学、国語、算数、会計、倫理と礼儀作法、衛生と生理学から構成されている。「家

政学」講座は、家政学、国語、数学、倫理と礼儀作法、会計、家事のための化学、「洗濯、アイロンかけ、シミ抜き、クリーニング」の講座は、洗濯、アイロンかけ、シミ抜き、クリーニング、国語、算数と会計、倫理と礼儀作法、装飾デッサンで構成されている。どの講座も中心となる技術の習得とともに、国語、算数、倫理と礼儀作法が必ず組みこまれている。実技を身につけるために、生徒たちはしばしば教員の許可を得て、製糸工場、織物工場、家具工場、商業施設、農場などに見学に行くことができたと記されている。初等教育修了後の読み書き、計算、そして女性規範が、当時の結婚前の女子のために必要な教育と考えられていたといえよう。コースとして履修する以外に、ひとつないし複数の個別授業を履修することもできるが、この場合には修了証は与えられない。

ミストラル家庭学校と同種の家庭学校として、ソル・ファナ・イネス・デラクルス家庭学校のカリキュラムが、1924年の公教育省学校局技術教育部の記録に残っている（Cuaderno que manifiesta los nombres de las profesoras de planta de la escuela hogar “Sor Juana Inés de la Cruz, clase y días y horas en que enseñan, 25 de febrero de 1924, AHSEP）。それによれば、ソル・ファナ・イネス・デラクルス家庭学校では、技術教育科目として料理、裁縫、リネン制作が週5日、レース編み、帽子作り、ミシン刺繍などが週4日開講されている。また、ガブリエラ・ミストラル家庭学校により任命、派遣された4人の教諭が一般教育科目を週5日、9時から12時まで担当した。また、ガブリエラ・ミストラル家庭学校の他の教諭が、刺繍、産業、レース編み、裁縫、家政学、絵画を担当している。同様に、フランス語は月、水、金の週3日8時から9時半に授業があった。

ガブリエラ・ミストラル家庭学校とソル・ファナ・イネス・デラクルス工業学校の間には、しばしば名称の変更および公教育省技術局の記録上の混乱が見られる。2つの学校には、カリキュラムも類似点が多く、一般教育に読み書き、計算、礼儀作法、そして育児、家政学、衛生、家事のための基本知識が置かれ、個々の技術の習得がある。また、両校では、ガブリエラ・ミストラル家庭学校からの教員の派遣による協力を行なっている。家庭学校と女子技術学校の2つの学校では、ガブリエラ・ミストラル家庭学校の教育目的



と同じく、カリキュラムにおいて家庭での母親としての役割の準備が教育の前提とされ、その上に個々の技術の習得が行われたと結論できる。

女子技術学校の草分けである国立女子実業学校の1916年のカリキュラムと家庭学校のカリキュラムを比較してみよう。メネセスによれば、政府広報(Diario Oficial septiembre 1 de 1916)の中でこの学校の教育目的について、「女性が報酬のある仕事に就き、視野を広げるために一般教養を身につけるように、出来る限り短時間で女性に技術面の教育をする」と述べられている(Meneses 1983:208)。国立女子実業学校では、講座は技術教育と一般教育から構成されている。技術講座としては、仕立屋方式の裁縫、婦人服デザイナー式の裁縫、下着の縫製、帽子作り、レース編み、髪結い(美容師)、花屋、飾り紐、美術品製造、絵画と装飾、料理と保存食、薬局店員の11講座である。その職種は「女性らしさ」と結びついた狭いものであるが、家庭学校の技術教育よりは家庭外の仕事に結びつきやすい技術が提供されている。これらの技術と比較すると家庭学校では、家庭内での家事のための技術に重点を置き、提供されていることがわかる。女子実業学校の一般教育は、国語と書き方、代数と幾何、生理学と衛生、地理と歴史、唱歌、絵画、家政学、体育、女性らしい仕事(裁縫、織物、刺繍)、料理が履修科目としてあがっている。

また、国立女子実業学校には2年修了の「主婦(ama de casa)コース」が設置されており、その教科内容は実業教育の一般教育科目とほとんど同じだが、「代数と幾何」、「地理と歴史」の代わりに「会計と家計」が置かれている。国立女子実業学校で「主婦コース」が作られ、その伝統を基礎に家庭学校では「倫理と礼儀作法」という規範教育が加わり、さらに家事技術として「保育」「看護」といった家族のケアを含む内容がカリキュラム化され、正規コースとしてカリキュラム化されたと考えられる。

家庭学校は、1929年の技術教育の再編を受け、女子技術学校はミゲル・レルド・デテハーダ女子商業学校と国立家政学校を除き、裁縫・縫製学校へ再編されていった。再編を逃れ、存続を許された国立家政学校にも、家庭運営のための技術教育として「主婦コース」が置かれている。1929年の国立家政学校のコース内容を見てみよう。正規コースは、昼のみの2年で修了する「裁縫コース」と「主婦コース」の2コースがある。他に自由コースが開設され、

表6 1929年以前の主要な女子技術学校とその特徴

学校名	創立年	主要な提供科目および特徴	出典および注記
国立女子実業学校	1871	1880年代：読み書き、計算、製本、裁縫、刺繍	Bazant (1993:38) より
		1890年代：電気メッキ、電信、びっくり箱製作、速記、タイプ、リトグラフ	Bazant (1993:121) より
		1916年：正規コース：技術教育+一般教育 主婦コース：上記科目+（幾何代数の替りに）会計・家計	AHSEPより
ミゲル・レルド・デテハーダ女子商業学校	1901	速記、タイプ スペイン語、商業地理、代数、商業会計、商業会計実践	Bazant (1993:257) およびAHSEPより
ケレタロ・コレヒドーラ工業技術学校	1901	速記、タイプ 手仕事（飾り、造花、小箱、額作りなど）、裁縫	Bazant (1993:257) およびAHSEPより 1936年に商業・裁縫学級へ改編
国立女子家政学校	1917	家政学、育児学、国語、英語、代数と幾何など（家庭科教員資格取得可） 技術講座（料理と保存、裁縫、英語、帽子作り、レース装飾、ミシン刺繍） 夜間自由講座（ミシン刺繍、料理と保存、裁縫、帽子作り、手仕事）	AHSEP (Datos Estadística de los cursos nocturnos de la Escuela N.de Enseñanza Doméstica) より
ガブリエラ・ミストラル家庭学校	1922	正規コース：一般教育と家事、育児学の組み合わせ 自由コース：技術+一般教育	1928年にガブリエラ・ミストラル商工業学校へ名称変更、後1936年に第三商業・裁縫学級に改編
ソル・フアナ・イネス・デラクルス（家庭/工業）学校	1924	技術教育（料理、裁縫、リネン制作、レース編み、帽子作り、ミシン刺繍など）+一般教育 家事労働者養成短期講座	1924年には技術局への視学官の報告書に学校の記載がある。1925年に工業学校として登録。1928年にソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校に改称、1936年に商業・裁縫学級へ改編
女子労働者工業学校（夜間学校）	不明	読み書き、計算、手仕事、料理、裁縫、家庭科	1928年の技術学校のリスト中に記載されている。

ミシン刺繍、料理、果実の保存、裁縫、英語、女性の仕事、リネン製品制作、修理、帽子作り、手作業が各2年コース、絵画が1年コースで提供されている。

技術教育が再編される過程で、より高度な技術教育へ向けての体系化が行われる中で、女子技術教育は、女性の果たすべき第一の役割は家庭での役割とし、経済的に主婦に専業できない場合に限り手に職をつけることが前提であったために、常に「主婦コース」が技術教育分野に一定の場を占めていた。そして、女子技術教育では、主婦と「女性らしい」範疇の職業技術のみが許容された。国立女子実業学校においても、前述のように技術教育として裁縫が中心となっていたが、同時に2年間の「主婦コース」が置かれている。「主婦コース」は、小学校教育を修了した後の一般教育に加え家政学、料理、家計などを配したものだだった。

1929年の再編以前の女子実業学校をはじめとする主要な女子技術学校について、中心的な提供科目およびその特徴を表6にまとめた。表からもわかるように、家庭学校の新規性は、「主婦コース」が拡大され、「家庭のためのコース」が中心となる正規コースとして位置づけられていることである。正規コースを構成する一般教育と技術教育に関しては、一般教育が男子技術教育に倣って改善され、それに「倫理と礼儀作法」が加えられた。また、家庭のための技術教育として家事技術のみでなく子どもと病人の世話つまり家族管理の技術である育児、看護が加えられている。家庭学校は、小学校修了後の女子のための一般教育と家庭運営の知識と技術を教育することが中心となり、家事の近代化、主婦の近代化がその目的となっている。家庭学校は、近代的「花嫁学校」が主要な役割といえよう。しかし、ほぼ10年の間に、科学的家事の知識、科学的家庭人の役割は技術という範疇から除外され、他の女子技術学校と比べても登録者数は表3に示されたように激減している。その役割は10年間で終わり、1929年の再編時には、家庭学校は姿を消し「主婦コース」は国立家政学校においてのみ象徴的に残された。

### 3.4 家庭学校の生徒たち

次に、この学校に通っていた女性たちについて見てみよう。ガブリエラ・ミストラル家庭学校の生徒の要件は、12歳以上となっている。視学官の報告

書（Dirección de Enseñanza Técnica, Asunto, Informe de la visita que con esta fecha practiqué a la Escuela “Gabriela Mistral”, 5 de febrero de 1922）によれば、1922年2月の開設当時の登録者は391名だった。1922年9月の報告は、夜間クラスの授業についての報告があることから、昼だけでなく夜間クラスもあったことがわかる。1924年に生徒数は1,787人に増えており、当時はかなり人気があったと考えられる。時間割はきちんと決まっておらず、午前の最初の授業は8時15分に始まるが、9時10分、10時、11時、12時開始など開始時間はまちまちで、授業時間も1時間、1時間半、2時間など科目により一定ではない。午後は3時、4時開始の授業に加え、夜間クラスの授業は7時始まりであることが報告されている。また、視学官の報告から、8時から9時半の裁縫のクラスには112名が出席しているが、ミシンは5台しかないこと、また、8時から10時までのレース編みの授業は出席者が20名、調理の授業には定員30名の教室に260名が詰めかけ、使える唯一のコンロが壊れていたなど、授業風景が具体的にわかる。

学校局技術部にはガブリエラ・ミストラル家庭学校の生徒の年齢層についての記録は残っていないが、ソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校と類似したものだろうと推測できる。ソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校の報告書によれば、正規コースへの登録者21名、自由コースへの登録者567名で、14歳以上20歳まで311名、20歳以上277名となっている（Escuelas Técnicas, Escuela “Sor Juana Inés de la Cruz” Anexo Número 1, Datos Estadísticos del Año 1929）。この内、自由コースの修了者356名、正規コースの修了証書取得者は8名である。

また、国立家政学校の1929年度登録者は741人で、年齢層は14歳から20歳未満が451人、20歳以上が290人となっている。自由コースの修了証を得た学生数は620人、正規コースの修了証を得た学生は61人となっている。職業資格を獲得した学生は無く、報酬のある仕事についている生徒は160名であることが報告されている。夜間コースも併設されているが、1年間の自由コースのみで、ミシン刺繍、料理と保存食、裁縫、帽子作り、手作業のコースが提供されている。登録者数は、377名、14歳から20歳未満が209名、20歳以上が168名である。修了証を獲得した生徒は7名のみである。家政学校設立当初

の目的の一つである家庭科教員の資格をとっているものはいない。教師についても、38名中教員資格を持っている教員は14名で資格なしの教員が20名、医者2名、その他の資格2名となっている（*Datos Estadísticos de los cursos diurnos de la Escuela N. de Ense. Doméstica, Año de 1929, AHSEP*）。

ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、メキシコ市の西部、現在のモラレス地区（*Colonia Morales*、旧コロニア・デラボルサ）のペラルビージョ（*Peralvillo*）124番地にあった。ゲレロ地区（*Colonia Guerrero*）、サン・ラファエル地区（*Colonia San Rafael*）、サンタマリアデリベラ地（*Colonia Santa María de Rivera*）などを校区としてカバーしている。国立家庭学校は、同じくモラレス地区にあるカルメン修道院（*Convento del Carmen*）があったアステカス（*Azteca*）1番地にあった。モラレス地区は、1882年に土地開発が始まり、カルメン修道院の北側にできた居住地区で、ディアス時代の産業化、都市化のなかでメキシコ市の旧市街の外縁に昔ながらの先住民の居住地のそばに作られた新興居住地だった。開発当初から、労働者、職人、労働者などの貧しい層が住む地区と言われている。ブリスによればディアス時代に貧民層の居住する地区として知られ、労働者や農村からの移住民を相手にした売春宿があり、底辺のカテゴリーの売春婦が多い地区として知られていた（*Bliss 2003:255*）。ソル・フアナ・イネス・デラクルス工業学校は、クアウテモク地区（*Colonia Cuahutemoc*）のサンディ・カルノット通り（*Avenida Sandi Carnot*）63番地に設立されていた。中心部からは少し外れた、活気のある庶民的な地区から若い女性たちが通ってきたことが想像できる<sup>19</sup>。

女子技術学校に通う生徒たちは、どのような女性たちだったのだろうか。前述の地区から通学する家庭学校および家政学校に通う女性たちは、小学校を中退あるいは卒業した若い女性たちで、他の技術学校よりも年齢層の幅が広い傾向がある。1918年の男女を含めた技術学校の生徒の年齢分布をみると、14歳未満が194人、14歳以上20歳未満が5,018人、20歳以上が1,485人と14歳以上20歳未満の生徒が中心だったことが報告されている。家庭学校や女子技術学校の場合は、14歳以上20歳未満の生徒数と20歳以上の生徒数はそれほどの違いはない。小学校卒業直後に来る生徒もいれば、20歳以上の女性も履修していた。登録者数から、正規コースよりはむしろ技術訓練を中心とした自由

コースに人気があることが見て取れる。家庭学校に通う女性たちの写真を見ると、昼の授業に参加する中間層の若い女性たちが写っている。身綺麗で、当時の流行の服を身につけており、いわゆる生活苦のある貧困層の女性たちではないことが見て取れる（写真1）。



写真1 ガブリエラ・ミストラル工業学校 裁縫の授業風景

これについては、ソセンスキも同様の見解を示している。ソセンスキは、一般に昼の女子職業学校の生徒は中間層の家族出身者だったと述べている。夜間学校は労働者階級を対象とし、女子夜間学校には女性労働者、特に女工や女中と呼ばれる女性たちが通っていた。夜間工業学校、夜間女工学校では、読み書き計算と手仕事を教えた。ボルサ地区のカルメリータ修道院(Convento de Carmelitas)に設立された家政学校の夜間クラスは、「メキシコ市の中間層や上層の家で働く召使を養成するために、14歳以上の「女中」のための短期間の講座が提供された」と述べられている (Sosenski 2010:260)。

また、当時の女性誌『女性』でも家庭学校が紹介されている。1928年に、タマウリパス (Tamahulipas) 州、ビクトリア (Victoria) 市に家庭学校が作られ、約500人の生徒が在籍した。タンピコ (Tampico) 市では、600人、他の学校では300人の生徒が在籍し、家事を学んだ (Mujer 1928.5.1, No.17)。

また、1929年2月のソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校の紹介記事によれば、「主婦コース」では、家事について教えるだけではなく、家庭で主婦が果たすべき知的役割について配慮され、妻、母親としての役割を果たすための教育が実施されて、家庭婦人が参加するために、幼稚園が作られていた。また、良質の家事使用人を養成するため、16時間から18時間の簡易講座が提供されていた (*Mujer*:1929.2.1, No.25)。同時期のアグアスカリエンテス (Aguascalientes) における連邦立工業学校 (Escuela Industrial Federal) の募集ビラには、女性労働者 (女工)、家事労働者 (女中) のために夜間コースを開設することと、家庭料理、裁縫、読み方、書き方、家庭科 (家政学) の授業が18時から20時に提供される、と書かれている (写真2)。

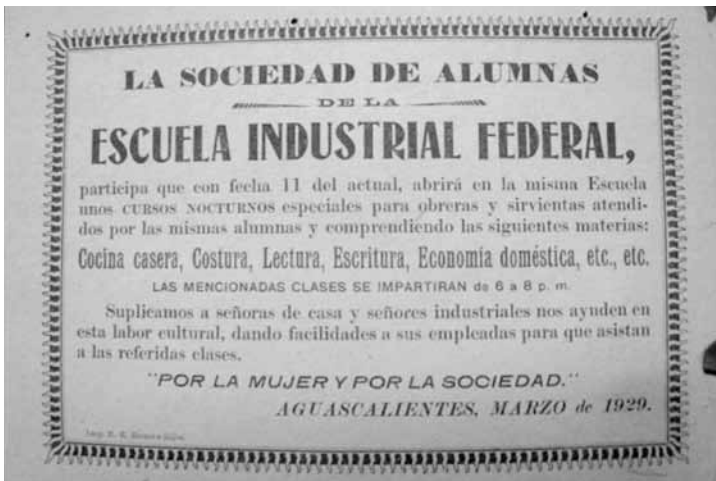


写真2 アグアスカリエンテス工業学校のちらし

昼の主婦コースには、未婚あるいは既婚の10代から20代の女性たちが通学していた。正規コースの時間割からは、仕事は持っておらず、一般教養と近代的な家事技術と育児学、衛生の知識などを身につけることを目的とした中間層出身の女性たちを対象にしたと考えられる。当時、共学で男子学生と肩を並べて勉強する女子学生というと、フリーダ・カーロ (Frida Kahlo) の姿を思い起こすが、プレパトリアや女子中等学校で子どもを教育するほど親の教育レベルは高くはなく、経済的余裕もない、中間層の中でも下層の家庭

出身の生徒たちが、小学校修了後に少し上のレベルの「女性らしい」教養を見につけ「主婦」のお墨付きを得るために送られてきたのだろう。ガブリエラ・ミストラル工業学校の全体写真からは、年齢層がかなり多様で服装もそれほど裕福ではないが、非常に貧しいわけでもない、多様な年齢層の少女や女性たちの姿が写っている（写真3）。



写真3 ガブリエラ・ミストラル工業学校の集合写真

正規コースよりも時間的な制約が少ない自由コースは、同じく若年層の女性たちが履修していた。短期間で技術を覚え、それを生かして仕事をしたいと願う未婚の女性たちが多かったのかもしれない。自由コースでは、経済的に自立して生活するために十分な技術を獲得できるとは考えにくい。技術科目の根柢はあくまでも家事の延長であり、家庭で出来る仕事である。結婚するまでの間、あるいは結婚後に家計補助が出来る程度の収入を得ることを期待して就学している生徒たちだろう。「主婦コース」の修了資格も自由コースの修了資格も、専門職として役に立つ資格ではない。修了証は特に社会に必要とされるものでもなく、なくてもよいがあれば何かしらの付加価値をつけられるというものであろう。都市の近代的な環境を楽しむ、活動的な中間層の未婚、既婚の女性たちの姿がうかがえる（写真4、5）。





写真4 ガブリエラ・ミストラル工業学校 造花作りの授業風景



写真5 ソル・フアナ・イネス・デラクルス家政学校の授業風景

一方、夜間コースの女性たちはどうだろうか。単なる技術訓練だけではなく、読み書きや計算も教えられ、家庭学校が小学校を中退して働いている女性たちの補償教育の役割を果たしていたと考えられる。工場などの女性労働

者や都市の中間層や裕福な家庭で女中として働いている女性たちが通って来る可能性もある。サセンスキによれば、女子の児童労働は男子と比べ雇用が非常に少なく、主な働き口は家事労働者しかなかった (Sasenski 2010)。女中として雇い入れている家庭の中には、行儀見習いとして子どもを預かる場合もあった。学校に通わせることを条件として雇っている場合もある。学校に行かせるとすれば、この技術学校の夜間コースが最も送り出しやすい教育機関であつたらう。

#### 4. 家庭学校の社会背景に関する考察

なぜ、1920年はじめに、近代的メキシコ版花嫁学校である家庭学校が生まれ、短期間で勢いを失ったのだろうか。家庭学校に関する記述には、しばしば慈善活動、「貧しい層」、「経済力がない」家庭の子女教育というニュアンスがつきまとう。これは、設立された地区が貧しい層の居住する地区として当時知られていたことにも関係するが、家庭学校の昼間のコースに通う生徒たちの姿を見ると、「貧困層」出身と言うよりも、都市生活者である庶民の女子、女性たちの姿が浮かび上がる。家庭学校は、中学校やプレパトリアに手が届かない庶民の子女が、主に小学校卒業後に教養と家事全般を身につけ、それに関連した「技術」を学ぶ学校だった。

家庭学校は、その設立以前に国立女子実業学校にも置かれていた「主婦コース」の延長上にある。しかし、それまでの「主婦コース」との違いは、「主婦コース」が実業教育の副次的コースだったのに対し、家庭学校ではそれが主たるコースとして設置されたことである。また、カリキュラムから一般教育にも重点が置かれていたことわかる。女子実業学校の「主婦コース」に比べ、料理、裁縫、洗濯、アイロンかけなどの家事だけでなく、育児学や看護などの家族のケアに関する科目がカリキュラムの中でも大きな比重が置かれていた。

本論では論ずることができなかったが、この背景には、1920年から1940年の間にメキシコの公共政策に大きな影響を及ぼした優生学があることを示唆したい。メキシコでは、1921年のメキシコ児童会議を契機として、優生学が取り入れられた。優生学が育児学と結びつき、公衆衛生や学校における衛生

教育として政策化された過程は、松久（2012:149-172）で論じたが、当時、メキシコ革命の動乱の中で、メキシコの人口の5%が失われ、幼児死亡率は20%を超えていた。人口増加とともに幼児の死亡率を下げ、健康な国民を育成するために、様々な公共衛生政策が実施された。1921年には学校衛生保健サービスが開始され、育児講座や運動場の建設、妊娠中の母親のケアのための衛生部隊の創設が行われた。1922年には児童衛生センターが設立され、児童衛生サービスの出産奨励プロジェクトにより、育児学校の設立が提言された（Stern 1999:374）。こうした優生学の影響の下で、近代国家における女性の役割として、未来の優良な国民を産み育てることが重要な任務となった。家庭学校では、そうした流れの中で、家事を切り盛りする伝統的な主婦としての役割だけではなく、健康な子どもを育て、家庭での衛生状態に気を配り、家族の健康を維持するための近代的「主婦」の知識と技術を付与することが重視された。

もう一つの家庭学校設立の背景として、都市人口の増大と都市文化の繁栄がある。人口統計ではメキシコの都市人口の割合は、1910年には28.7%、1921年には31.2%、1930年には33.5%と次第に増加している。特に、連邦区は、それぞれ87.3%、88.7%、92.3%と都市部への人口流入が増している。他州から連邦区へ人口移動は、1910年に約28万人、1921年に38万人、1930年には59万人が流入した。メキシコ市を中心に人口移動が急速に進んでいる。第2章で見たように、メキシコ市の女性人口の割合はメキシコ全体の平均値よりも高い。都市人口の増加とともに、女性たちの活動範囲も広がってきた。中間層の家庭での家事労働者（女中）の需要も高まった。また、農村から都市への人口移動の拡大とともに、都市では貧しい女性たちが手に職がないために売春をして生計を立てざるを得ず、売春婦の増加が社会問題となっていた。厚生省の調べによれば、メキシコ市で登録されている売春婦は1925年には1,445人、1926年に3,365人、1927年に4,638人で、わずか3年の間に3倍近く登録者数が増えている。隠れた売春婦の数は、首都では2万人から4万人に及ぶだろうと推計されていた（Bliss 2003:264-265）。それに対して、優生学者の間から遺伝的な伝染病の危険性が指摘されていた。

こうした都市環境のもとで、教育省は女性が生計を立てるための職業技術

教育の必要性を認識していた。しかし、女性の仕事は、街や工場や、店や酒場ではなく、家の中で出来る仕事に限定された。カトリック婦人連合も同じように、1925年に同連合の下部組織である女性防衛隊が、生徒が小学校卒業後に仕事を持てるように学校に作業場を設立する活動に力を注いでいる(Sosenski 2010:258)。つまり、政府は、若い娘たちが、売春婦が蔓延する都市環境において、小学校卒業後にふらふらと外に出て、売春婦になるか不道徳な行為に走らないように、女性たちを教育し収容しておく教育機関が必要と考えたのである。家庭学校設立の背景にはこうした社会背景が横たわっていた。

一方で、家庭学校は、ある程度経済的な余裕のある中間層の女性たちを対象に、育児学に依拠し未来の健康な国民を育てる使命をもった「近代的花嫁学校」だった。同時に、家事労働者や工場労働者の下層女性たちを対象とし、夜間コースを提供して技術を身につけさせ、識字教育を行う補償教育の場だった。新しい都市環境に生きる女性は、活動の範囲を前世紀よりも広げていた。家にいるべき女性たちが外に出るための口実として、教会以外にどこかに行くための「やむを得ざる理由」として、「貧困」が口実とされたのではないだろうか。家庭学校が貧困層の女子教育として社会に受容された一つの理由として、庶民層の女性の増大と外に出て行く女性が「貧困層であり、家計を助けるためやむを得ず仕事をする必要がある」というジェンダー規範へ対抗言説がつけられたのではないだろうか。

しかし、報酬につながらない主婦教育、資格にならない技術教育は、次第に女性たちにとっても社会にとっても、魅力を失っていった。家に女性をとどめ置くことを前提とした技術教育は、女性たちが生計を立てるためにはそれほど役に立つものではなかった。家庭学校の消滅は、女性のいるべき場所は家庭という規範と、女性が活動範囲を広げ、かつ生計を自分自身で立てようとしている現実のはざままで、揺らぐ女性規範を反映している。主婦教育は再編される国民教育に編入され、技術教育としての「主婦コース」は短期間でその役割を終え、技術教育から除外されていった。そして、女子技術学校は、産業化を前提とした女性向けの技術教育、つまり衣料・縫製産業向けの縫製工の育成に軸足を移していった。しかし、まだ「女子向け」の技術とい

う「家庭」の束縛に囚われた女子技術教育は、産業化社会において一人前の役割を与えられなかったし、職業教育としても産業化の周縁に置かれ、産業化に十分な役割を果たし得なかった。

ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、メキシコ革命後の一時期に、人口動態の変化や都市化、優生学を基盤とした社会福祉政策のもとで、育児学と家政学を核としたジェンダー役割を新たな女性のための「技術」として方向づける役割をになった。しかし、育児を核とした家庭環境の管理技術を、男性領域とされる産業化において産業労働者育成を目的とした技術教育に配置したことは技術教育の鬼子的存在となり、技術教育の中で周縁化されていった。その結果、技術教育において、女性には二級労働者としての役割とそれに見合う教育しか用意されなかった。一方、家庭管理と家族環境のケアは、初等教育の普及とともに女性の属性として小学校教育やその補償教育の中に組み込まれていく。その過程は、特に農村教育で顕著に導入されるが、その検討は別稿で考察することとし、今後の課題としたい。

## おわりに

ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、メキシコ革命後の国家再建政府がもつ近代的女性の育成をめざした。近代的女性像とは、カトリックによる伝統的な女性規範から脱却し、国民国家の一員として国民の再生産機能、つまり健康で優良な子どもを産み育て、国民を再生産する機能を果たす女性である。当時のメキシコは、人口減少への対処と優生学の影響を受けた公共衛生政策に関心もたれていた。女性たちは国家において再生産機能を担う国民としての役割を新たに与えられ、そのための教育として育児学や家政学的知識が必要とされた。

家庭学校では、育児学や家政学の知識が技術教育としてカリキュラムに組み入れられ、庶民層のなかに新しい「主婦」を作り出すことを目的として設立された学校だった。家庭学校で提供されたコースと教育内容は、都市における現実の社会階層を反映していた。昼間のコースでは都市の庶民層の比較的経済的な余裕のある家庭婦人ないしはその予備軍を受け入れ、当時、優生学者と政府により必要が叫ばれていた衛生や育児学の知識を与え、小学校卒

業後の教養教育を主に行う機関とした。一方、夜間コースは、都市労働者の女性たちを対象として、読み書きやジェンダー化された技術教育を提供した。

ジェンダー化された技術教育は、女性のあるべき場所、働くべき内容が家庭に基本を置いていたために、家庭で有用な技術、家事労働の延長上にある技術が教えられた。それらの技術は女性たちの経済的な自立につながるものではなかったし、家計補助であっても経済的自立を目指したものではなかった。家庭学校の「主婦コース」が次第に縮小され、中心が裁縫、商業科での秘書などの「女性向き」の技術教育に向かった背景には、女性が生計を立てるための経済活動の必要性が増大したことや、教育制度の拡大とともに小学校教育や農村教育において女子教育が制度化されたこととともに、女子技術教育の足かせがあったと考えられる。家庭学校は、貧困層の女子技術教育として労働市場での競争力を女性に与えるものではなく、近代化を推し進めるために国民の再生産を担う新しいジェンダー規範に沿った女性たちを養成するのが第一の目的であり、そのために「家庭の技術」を提供するものだったといえよう。家庭学校は、育児、家庭衛生、家族の栄養管理などの家庭の技術の習得を目的とした「主婦コース」を主軸コースとして設置し、家計を助けるための「女性向きの」技術の習得を副次的コースとした点において、それまでの女子技術学校とは明らかに異なっていた。19世紀末から20世紀初頭にかけて、メキシコの近代化とともに女性は家庭における再生産役割を期待されてきた。しかし、明確に国家と女性の再生産機能が結びつけられ、カリキュラムにおいて健康な国民の育成が主軸となるのは、家庭学校においてである。また、それは家庭学校が近代的家庭の技術として技術教育に配置された理由でもあろう。

## 注

- 1 オブレゴン政権のもとでメキシコの公教育省 (Secretaría de Educación Pública) の初代教育相 (1921~23年) となり、独自の教育哲学の下にメキシコ革命後の国民国家形成のために民衆教育に力を入れ、識字教育、農村教育や文化伝道団などの政策を展開した。メキシコの国家的アイデンティティを「混血」においた『宇

- 宙の人種 (Raza Cósmica)』をはじめとして、数々の著作を執筆した。
- 2 1922年に、エンジニアの仕事を手伝う人材を養成するために設立された。2年間、労働者として実習を行い、4年は技師の資格をもつ親方として働いた。(Calvillo et al. 2006:65)
  - 3 技術教育とは、人間の役に立つ道具やものを得る目的で自然的材料を変形する方法とそれに対応する技能とにつながりをつけ農・工・商の生産活動で働ける人間を形成するための教育。(Diccionario de la Historia de la Educación en México, Técnica の定義、教育用語辞典、第4版より)
  - 4 農村教師の聞き書きなどに見られるように、農村から優秀な学生が推薦を受け、近隣の都市にある中学校や師範学校に小学校修了後に入り、教師となる例があったが、その数は限られていた。(Castillo Ramírez et al. 2000)
  - 5 連邦区における10歳未満の人口は、男子は94,884人、女子は94,950人である。1921年の教育統計を見ると、連邦区の公立小学校は293校のうち女子小学校91校、男子小学校81校、共学121校である。私立小学校は全部で161校、女子小学校40校、男子小学校39校、共学82校である。生徒数は、公立学校では男子41,069人、女子40,600人、私立学校では男子11,316人、女子9,605人となっている。公立、私立を合わせた小学校の就学人口は男子が52,385人、女子は50,205人である。連邦区では半分近い児童が小学校に就学していることになる。(Meneses 1986:365)。
  - 6 1821年に技術教育を担う学校を計画し、1823年にギルド制を廃止した。1823年の政令では、137条、157条でエンジニア、鉱山技師、道路・橋梁などの土木技師、水路技師、商業、技術工芸に関する技術者の教育について言及している (Rodríguez 2002)。
  - 7 1880年頃には「捨て子の家 (Casa de Niños Expósitos)」[「孤児工業学校 (Escuela Industrial de Huérfano) が設立された。また、プエブラ実業学校 (Escuela de Artes y Oficios de Puebla) は慈善施設の付属学校として設立された。
  - 8 カランサ (Venustiano Carranza) 大統領の下で、1915年8月から1917年2月28日まで機能した。
  - 9 メキシコ市にあった技術学校の詳細は、松久 (2012:209) 参照。
  - 10 学校局の管轄下に、大学部、初等教育部、教員養成と技術教育部、識字教育部、出張所、文化伝道団、行政部、統計と古文書部がおかれた。
  - 11 ノンフォーマル教育は、一般に一定の教育目的のために組織された教育であるが、教育の資格付与やフォーマル教育 (正規) 教育に接合しているとは限らない。ここでいうノンフォーマル教育とは、初等教育終了後の教育として基礎教育や職業訓練を指している。
  - 12 ソル・フアナ・イネス・デラクルス工業学校は1925年の設立とされているが、1924年の公教育省古文書館の記録によれば、それ以前に「ソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校」と記載された学校の存在が確認できる。ソル・フアナ・イ

ネス・デラクルス工業学校は、1928年にソル・フアナ・イネス・デラクルス家庭学校へ再び名称変更した。当時の女子技術教育に関する公教育省の認識として、家庭学校と技術学校の区別が曖昧だったことを示していると考えられる。

- 13 家政学校は、現在のモレロス区、バリオデカルメン (Barrio de Carmen) に設立された。家庭と家族のための主婦教育を目的とし、家庭収入のための仕事を教えた。料理、菓子作り、保存食、おもちゃ作り、刺繍、織物、裁縫の講座を提供した。講座を修了すると家政学を修めた「家政士」(Hogarista de Economía Doméstica) の称号が与えられた。その後、保育、衛生、看護、母親教育などの知識が教育に取り入れられた。1945年以降は、技術中等学校卒後の2年間の教育をうけると栄養士 (dietista) の資格を得られた。1947年以降は、4年の教育に延長された。1970年台にベステアノ・カランサ第6技術工業学校となり、保育士、介護士、栄養士の資格が取れるようになった。1980年台のはじめに、第10技術工業学校 (Centro de Estudios Tecnológico Industrial y de Servicios No.10, 略して CETIS10) となり現在に至っている。保育士資格の取れる後期中等教育として中等技術教育総局 (Dirección General de Educación Secundaria Técnica) の管轄のもとに有る。<http://www.sems.gob.mx/aspnv> (2012年取得)。
- 14 『女性のための読本』は、5つのセクションから構成されている。全207ページのうち「家庭」48ページ、「メキシコとスペイン系アメリカ」55ページ、「労働」9ページ、「精神的テーマ」86ページ、「自然」53ページのアンソロジーである。「家庭」のセクションには、「家と家族」「母性」の2つのテーマから構成されている。詳しくは、松久 (2012:206) 参照。
- 15 AHSEP, Departamento Escolar, Dirección de Enseñanza Técnica, Escuela Gabriela Mistral, 1912-1922, caja 6, no.28.
- 16 視学制度は、ディアス時代に制度化された。当時のメキシコは、州政府が公教育の責任主体であり州により教育実態は異なっていた。全国で統一的な公教育を普及するために、シレラは教育会議を開催し公教育の統一化を進めており、その一環として視学制度が導入された。メキシコ革命後、公教育省は中央集権的な教育制度の形成を目指し、1922年の高教育省内規により学校局のもとに視学制度を編成した。視学官は、州毎に教員資格を持つ教員が任命され、学校を巡回し、学校規則どおりに教育が運営されているか、教育の質や教材、学校の運営などを監視、評価するだけでなく、教育方法の指導、運営など積極的な関与が求められた。ガブリエラ・ミストラル家庭学校を始めとする技術教育機関を毎月視学官が巡回し、報告書が提出されている。
- 17 専門教育試験は、学校長、当該科目の教師、一般教育の教師で構成される4名の試験官により実施された (AHSEP)。
- 18 流行、レース編み、帽子制作、ミシン刺繍、料理、果実の保存、舐めし革製品制作、国産品製造、石鹸・香水製造、保育学、家政学、装飾絵画、洗濯・アイロ



ンがけ・シミ抜き・クリーニング、飾り紐制作、髪結いの講座が提供されている。  
19 ガブリエラ・ミストラル家庭学校は、三文化広場の北部、ソル・ファナ・イネス・  
デラクルス家庭学校は現在の地下鉄レポルシオン駅の周辺近くにあった。

### 参考文献

- Archivo Histórico de Secretaría de Educación Pública (AHSEP).  
Archivo de Palabra (AP), Instituto de Investigaciones de Dr. José María Luis Mora.  
*La mujer: Semanario de la escuela de artes y oficios para mujeres*, 1880-1883.  
*Las hijas del Anáhuac: Ensayo literario*, 1873.  
*Las hijas del Anáhuac: Violetas del Anáhuac*, 1888-1889.  
*Mujer*, 1926-1929.  
Primer Congreso mexicano del niño. conclusiones. *Revista mexicana de educación*. Tomo II.  
No. 11. enero 15 de 1921. México.
- Bazant, Milada. 1993. *Historia de la educación durante el Porfiriato*. México: El Colegio de México.
- Bliss, Katherine Elaine. 2003. Figuras revolucionarias: Prostitutas, trabajo y comercio sexual en la Ciudad de México. En *Género y cultura en América Latina*, pp. 239-280. Coordinado por Gutiérrez de Valasco, Luzelena. México: El Colegio de México.
- . 2007. Theater of Operations: Reform Politics and Battle for Prostitutes' Reeduction at Revolutionary Mexico City's Syphilis Hospital. In *The Women's Revolution in Mexico 1910-1953*. Edited by Mitchell, Stephanie and Schell, Patience. Plymouth, UK: Rowman & Littlefield Publishers. INC.
- Blum, Ann. 2009. *Domestic Economies: Family, Work and Welfare in Mexico City 1884-1943*. Lincoln & London: University of Nebraska Press.
- Calvillo Velasco, Max, y Ramírez Palacio, Lourdes Rocío. 2006. *Setenta años de historia del Instituto Politécnico Nacional*, TomoI. México: Instituto Politécnico Nacional, Dirección de Publicaciones.
- Castillo Ramírez, María García, Dolantes González, Alma, and Tuñon, Julia. 2000. *La noble tarea de educar: Recuerdos y vivencia de una maestra jalisciense*. México: Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- Galván Lafarga, Luz Elena ed. 2002. *Diccionario de historia de la educación en México*. México: CIESAS, UAM.
- INEGI, 1996. *Estados Unidos Mexicanos Cien años de censos de población*. México: INEGI.

- Latapí, Pablo coor. 1996. *Un siglo de educación en México*. México: Fondo de Estudios e Investigaciones.
- Leyes Stepan, Nancy. 1991. *The Hour of Eugenics: Race, Gender and Nation in Latin America*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Martínez Jiménez, Alejandro. 1996. *La educación primaria en la formación social mexicana 1875-1965*. México: Universidad Autónoma Metropolitana.
- Meneses Morales, Ernesto. 1983. *Tendencias educativas oficiales en México, Vol.I, 1821-1911*. México: Centro de Estudios Educativos, AC., Universidad Iberoamericana.
- . 1986. *Tendencias educativas oficiales en México, Vol.II, 1911-1934*. México: Centro de Estudios Educativos, AC., Universidad Iberoamericana.
- Mistral, Gabriela. 1997. *Lecturas para mujeres*. México: Editorial Porrúa.
- Ramos Escandón, Carmen. 1987. Señoritas porfilianas: Mujer e ideología en el México progresista. 1880-1910. En *Presencia y transparencia: La mujer en la historia de México*, pp.145-162. Editado por Ramos Escandón, Carmen. México: El Colegio de México.
- Rodríguez, María de los Ángeles. 2002. Historia de la educación técnica. *Diccionario de historia de la educación en México*. Editado por Galván Lafarga, Luz Elena. México: Sección Siglos XIX y XX. CIESAS, UAM (電子書籍のためページ番号なし).
- Rodríguez, Arnulfo. 1926. *Cosas de niños*. México: Publicaciones de SEP, Talleres Gráficos de la Nación.
- Schell, Patience. 2006. Gender, Class and Anxiety at the Gabriel Mistral Vocational School: Revolutionary Mexico City. In *Sex in Revolution: Gender, Politics and Power in Modern Mexico*, pp.112-126. Edited by Olcott, Jocelyn, Vaughan, Mary Kay, and Cano, Gabriela. Durham & London: Duke University Press.
- Sosenski, Susana. 2010. *Niños en acción: El trabajo infantil en la ciudad de México 1920-1934*. México: El Colegio de México.
- Stern, Alexandra Minna. 1999. Responsible Mothers and Normal Children: Eugenics, Nationalism and Welfare in Post-Revolutionary Mexico, 1920-1940. *Journal of Historical Sociology*, Vol.4 (December): pp.369-397.
- Uñas Horcasitas, Beatriz. 2007. *Historias secretas del racismo en México 1920-1950*. México: Tusquets Editores México, S.A. de C.V.
- 松久玲子、2012年、『メキシコ近代公教育におけるジェンダー・ポリティクス』行路社。

Resumen

## La Escuela Hogar y la educación vocacional en México durante la década de 1920

Reiko MATSUHISA

La Escuela Hogar “Gabriela Mistral” fue fundada en 1922 por José Vasconcelos, el entonces ministro de Secretaría de Educación Pública. Esta escuela era dependiente de la Dirección de Enseñanza Técnica en el área de la educación vocacional. Tras la Revolución Mexicana se produjo un importante descenso de la población y un aumento de la prostitución femenina en las ciudades debido a la falta de oportunidades laborales para las mujeres. El gobierno mexicano posrevolucionario se propuso llevar a cabo la modernización del estado y la formación de las mujeres como reproductoras del nuevo estado moderno mexicano, liberándolo del yugo de la Iglesia Católica y bajo la influencia de planteamientos eugenésicos abanderados en el primer Congreso del Niño en México.

La educación vocacional para mujeres empezó a establecerse en el régimen del Porfiriato. Y después se fundaron las escuelas industriales y comerciales, la mayoría situadas en la Ciudad de México. Comparando con otras escuelas vocacionales para las mujeres, el interés principal en el currículum de la Escuela Hogar era ofrecer el curso de “ama de casa” al que se añadió “puericultura” como asignatura importante, también se ofrecían cursos de capacitación, tales como: trabajos domésticos, bordados, dibujos, etc., además de cursos de educación general para mujeres jóvenes que habían finalizado la educación primaria. Las alumnas de esta escuela eran jóvenes mayores de 14 años de estratos vulnerables de la sociedad, pero no eran pobres extremas, vivían en el área urbana y no podían asistir a otros

tipos de centros como las escuelas secundarias, las normales o las profesionales por escasez de recursos económicos. Así, la Escuela Hogar “Gabriela Mistral” fue fundada como una institución educativa para jóvenes con estudios primarios, dedicada a instruir las para la reproducción humana como “ama de casa”, y con capacidad de ayudar a la economía familiar si fuera necesario.

Sin embargo, y tras seis años de funcionamiento, esta escuela cambió su nombre a “Escuela Técnica Industrial”, y después a “Academia de Comercio y Costura 3” en 1929. Desapareció la necesidad de formar a la “ama de casa” en la educación vocacional, porque el curso de capacitación de esta escuela no preparaba a las mujeres para vivir de forma independiente económicamente. Asimismo coincidió con la introducción de las asignaturas de trabajos domésticos y puericultura elemental en la educación primaria, especialmente en la educación rural.

Bajo la influencia del proyecto eugenésico de modernización del gobierno mexicano se creó una institución especial, “la Escuela Hogar”, para la educación vocacional de mujeres. Sin embargo, este tipo de escuelas vocacionales no tuvo éxito, porque no podía responder a las necesidades de la fuerza laboral femenina, pues no ofrecían titulaciones profesionales y la educación para “ama de casa” iba dirigida a un trabajo “natural” sin remuneración económica, estando basada en la tradición perjudiciada de que la capacitación femenina debía estar orientada a la reproducción humana.

Home-Schools (*Escuela-Hogar*) and Women's Vocational Education  
in 1920s Mexico

Reiko MATSUHISA

**Keywords:** women's vocational education, history of Mexican education, vocational education, la Escuela- Hogar "Gabriela Mistral", home economics course